

“インターバル”の考え方を基礎の基礎から とにかく詳しく説明してみる vol.01

と、いうことで、

【インターバルを基礎の基礎から徹底的に解説してみる会】

やっていきましょう。

世間を見渡すと、僕に限らず、おそらくギターや音楽を教えている人のほとんどが『インターバル(の理解)は大事』と言っているかと思います。

これについては、過去に配布している【ギターと音楽の教科書】の vol.18、27~28 辺りでも一度解説していますね。

ただ、色々な人の悩みを聞いていると、もうちょっと、大元についての話や「演奏における具体的な使い方(考え方、捉え方)を伝えたほうがいいな」と感じたので、今一度、お話ししてみたいと思います。

この辺りを細かく解説しようとする、音楽史などの話も出てくるのですが、それだと少し話が長くなりそうなので、最初は、

「僕らが、これらの知識をスムーズに使えるようになるには、何をどのように解釈したらいいのか？」

と言う実践的な観点から見ていきましょう。

細かい音楽史などに関しては、過去にメルマガが何かで書いたような気がしますし、その内、それらをまとめてPDFにするかブログに載せておこうかとも思っています。

とりあえず、まずは『ギタリスト向け、実践！インターバル編』みたいなイメージで大枠を掴み、その後、細かい成り立ちなどを補足するような形で今回のテキストを作っていく予定です。

それではやっていきましょうか。

■1、色々と言の歴史や成り立ち、方法論はあるけど、
多くの場合、演奏に使う音は全 12 音

さて、まず大前提として、おおよそ僕たちギタリスト(と言うかほぼ全ての音楽家)は、

「12 平均律(十二平均律)」

という、

「1 オクターブを 12 等分する(そしてそれらの音に名前を付けて使う)」

という仕組みを使って音楽を奏でています。

(※一部、特殊なジャンルを演奏している人以外であれば)

(※※『1 オクターブ』のちゃんとした定義については後々。早く知りたい場合は、ウィキペディア等にも解説があります)

この「12 平均律」が世に編み出されるまでは、ピタゴラス音律やら純正率やら、誰が何をどうしてきたか？など、色々と言の遍歴、進歩があるのですが、その辺りは必要なことを必要な分だけ、今後のテキストに入れますので、ここでは割愛しますね。

で、その全 12 音とは、(音名で言うと)おなじみの「ドレミファソラシ(CDEFGAB)」とその間にある半音たち。

これで 12 音です。

ギターであれば、ある音から、1 オクターブ上のその音までの範囲に 12 個フレットが打たれていますし、ピアノでも 1 オクターブ内には、白鍵、黒鍵を合わせると 12 個鍵盤がありますよね。

そして、少し乱暴に言ってしまうと、ほぼ、その 12 音の組み合わせで、いわゆる「ポピュラーミュージック」と呼ばれる音楽の大半が作られている、と。

(※ただし、ポピュラーミュージックの枠外になりそうな音楽でも普通に 12 平均律は使われますが)

と、ということで、基本的に、僕らにとっては、この「12 音」が「音楽をする材料」となるわけですね。

■この12音の中から基準にする1音を決める

さて、この12音は、「この中でどの音が一番偉い」みたいな話ではなく、ある種、均一なパワーバランスで、ただ存在しています。

一応、ピアノの鍵盤の中央辺りにあるド音(日本式表記だと一点ハ、国際式表記だとC4)から見て、

・右側の一番初めに来るA音を『A=440Hz』の世界共通の基準ピッチ
(※場合によってはこのピッチもずらすことがあります)

として調律することや、音楽(理論)の様々な項目では『C(ド)音』を基準にして解説されていることが多いのは、皆さんご存じの通り。

ですが、これらは元々、この世界にナチュラルに存在していた『音=物体の振動』を、『“音楽”の体系』としてまとめやすくすることだったり、扱いやすくするために人間が設定したものですよね。

なので、自分が曲を作ったり、演奏したりするときは、12音の内、どれを基準にしてもよい。

と言うか、まずはどれかの音を基準にしないと、曲(演奏)をまとめられないし、他者と合奏するときに意思疎通が出来ない(非常にしにくい)し、実際のところ、全体を美しい響きに統一することがとても難しくなる。

と言うことで、出てくるのが『key(キー、日本語だと調(ちょう))』の概念です。

この『key』と言うものを、出来る限りわかりやすく、かつものすごく大雑把に説明してしまうと、

『基準にする1音をまず決めて、その音を中心に、一定の音の組み合わせを作ると、音楽としてとても良くまとまる仕組み』

みたいな感じです。

音楽史的には、いきなりkeyの概念がポンと出てきたわけではなく、時代を経るごとに体系化されていったのですが、現代を生きる僕らはいきなりkeyの意味することを学んでしまった方が速い。

で、先ほど書いたように、まずは基準にする1音を決めてしまう。

そしてその音を『tonal centre(トータル・センター)』と呼びます。(※場合によっては「キー・センター」と呼ばれていることもあります)

ここでの意味としては、「tonal=調(key)、調子の、centre=中心」ですので、文字通り「そのキーの、中心(=基準)とする1音」のことですね。

で、これまた先ほど書いたように、12平均律の、全12音の中から自由に選んでしまっても良い。

どういう理由でその1音を選ぶかは、

- ・自分が演奏する楽器で弾きやすいものであったり、
- ・ボーカルが歌える音域に合せてだったり、
- ・何かしらのこだわりや狙いのためだったり、
- ・何となくの気分だったり、

場合と状況にもよりますが。

まずはこの『基準の1音を決めた時点で、音楽をやる前提が整う』のですね。

と、ということで、今回はここまでです。

学んだことをまとめてみると、

- ・一般的に、僕らがやっている音楽は、1オクターブを12等分した、12平均律から導き出された全12音を使う
- ・その12音の中から、これから奏でる音楽(曲、セッション)で中心とする1音、『tonal centre(トータル・センター)』を決める
- ・tonal centreの決め方は、基本的には自由だが、場合や状況に合わせて選ぶこともある

こんなところですね。

こういったことは、音楽の勉強をしたり、教育を受けたりして、知っている人は当たり前知っている、でも、全く知らなくても弾けてしまう、さらに言えば、知らなくても実は無意識にやっていたりする。

この辺り、ギタリストにとって、演奏への敷居が下がっている、と言う点ではメリットもありますが、音楽の根本を理解していないまま進むと、後々、様々なことにつまづく可能性が上がってしまう、という点ではデメリットですね。

(※僕も十代前半の頃とか全然わかっていませんでした汗)

ちなみに、今回から解説していくのは、主にヨーロッパで培われたクラシック音楽(西洋音楽)の方法論です。

世界の大半のポピュラーミュージック(特に商業音楽のシーン)では、このロジックが大元として使われていますね。

そして実は、この西洋音楽の方法論が音楽体系の全てではなく、特定の地域や、特定の民族の音楽では、これとは違う方法論が今でも普通に存在していることを留意しておきましょう。(日本の伝統音楽などもそうですよね)

それでは、今のところ、全何回になるのかは決まっていないのですが、この機会に、僕らが使っている音楽の仕組みをきっちり学んでしまいましょう。

必ず、ギターをプレイする、ありとあらゆる面で役に立ちますので。

また次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼

P.S.

質問や、わかりにくいところがあったら、メルマガに返信して下さいね。